

善意の帝国

—イギリスのフィランソロピーと南アフリカ—

大澤 広晃 著

名古屋 名古屋大学出版会 2024年 466 p.

本書が掲げる帝国フィランソロピーとは、イギリス帝国史研究における人道主義とほぼ同義であるという。それと同時に、イギリス帝国の中核的な「政治文化・統治理念」でもあり、「帝国支配に組み込まれていく非白人に対する過度な抑圧や搾取を批判し、その保護と福利の向上を目指す思想および実践」(p.7)である。同義であるにもかかわらず、本書がフィランソロピーという用語を用いる理由は、この思想・実践が「人道主義」として定着する過程から浮かび上がる歴史、すなわちトランスインペリアル・ヒストリーという研究領域に到達できるからだ。

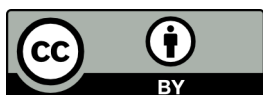
二部構成からなる本書は、それぞれ、第一部はイギリス、第二部は南アフリカを拠点に展開したフィランソロピーを描き、従来は必ずしも有機的に接合されていなかったイギリス国内史とその帝国史を架橋していく。対象とする時期は、ボーア戦争(1896~1902年)、南アフリカ連邦の成立(1910年)、土地法の成立(1913年)から人種隔離政策の強化(1948年)までをカバーしており、南アフリカがイギリスとの関係において自律性を確保していく時期と重なる。

本書のなかでは、イギリスに拠点をおく反奴隷制および原住民保護協会、そして南アフリカに拠点をおき、ジョン・デュベに代表されるような同時代のアメリカ留学経験をもつアフリカ人エリートとリベラル派白人が参加したヨーロッパ人・アフリカ人協議会が取上げられる。この点は、上林朋広(2025)『南アフリカの人種隔離政策と歴史の再構築』(明石書店)(本誌同号に資料紹介あり)と合わせて読みたい。

さらにそれらの活動は、イギリスから南アフリカへ一方向的に影響を及ぼすに留まらず、南アフリカ特有の展開がみられたり、アメリカ合衆国の影響を受けた南アフリカでの実践がさらにイギリスに影響を及ぼしたりもする。こうした展開を詳らかにする本書は、南アフリカに視座を置くことで、南アフリカをハブとした活動の広がりを示すことに成功している。

また、人種隔離政策の立案の背景として、アメリカ、南アフリカにおける人種関係の研究に触れる第4章は、科学史としても興味深い。他方、第5章ではアフリカ人とアフリカーナーそれぞれのナショナリズムの高揚の末に分極化していく南アフリカにおいて、どちらでもない道を模索する活動が訴求力を失っていった現実と向かい合う。こうした著者の主張は、二項対立の末に残った勝者の歴史のみでなく、より深い歴史の襞に分け入り、二項対立の狭間にあった様々な可能性と、それを押して進んだ歴史の分岐について考える機会を与えてくれる。

網中 昭世(あみなか・あきよ/アジア経済研究所)



本記事は、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際 (CC BY 4.0) ライセンスのもとで提供されています (<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed>)。オリジナルの出典と著者を表示することを条件として、自由に配布、複製、利用することができます。

